

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 100

2026. 2. 21発行

編集責任者：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第100回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ『書のまち春日井と小野道風の風景』

討論内容：2013(平成25年)3月3日に発会した『「ふるさと春日井学」研究フォーラム』も100回を迎えることになりました。「ふるさと春日井学」の魅力特色を発信して「ふるさと意識」を醸成して行こうという趣旨ではじめた第一回は、「書のまち春日井」の原点である「小野道風」の研究発表でした。今回のテーマ「書のまち春日井と小野道風の風景」は、原点に戻って100回目の節目として設定しました。12年の間に行政の中心地鳥居松地域の人々の意識も「まち」の風景も変わってまいりました。これからの「書のまち春日井」は、どのように発展してゆくのでしょうか、小野道風の歴史とは不可分の関係にある鳥居松地域の今後はどのように発展していくのでしょうか。再度「書のまち春日井と小野道風」のことについて考えるフォーラムをパネルディスカッションの形式で開催しました。討論内容：①道風研究の現況と「道風の風景」②「書のまち春日井」のまちづくりについて③「書のまち春日井」のこれから

パネラー：石黒 直樹 氏（春日井市長）

：安達 柏亭 氏（書家・道風研究家）

：河地 清 氏（「ふるさと春日井学」研究フォーラム会長）

司会：長谷川久幸 氏（本会会員）

日 時：令和7年12月21日（日）PM13時30分～16時

場 所：市民活動支援センター（ささえ愛センター）

春日井市教育委員会、中日新聞社の後援を受けて実施することが出来ました。当日参加者は30名でした。



会場風景、発表する石黒市長



《パネルディスカッション要旨》

司会（長谷川久幸 氏）：第 100 回目の「ふるさと春日井学」フォーラムを始めます。

『書のまち春日井と小野道風の風景』をテーマとして、：①道風研究の現況と「道風の風景」②「書のまち春日井」のまちづくりについて③「書のまち春日井」のこれからのについてそれぞれのパネラーから発表していただきたいと思います。

河地 清 氏：書のまち春日井と小野道風については、①小野道風の記憶と伝承②小野道風出生の真実 松河戸誌研究会（代表 長谷川正巳）塚田 忠雄（郷土春日井研究会会長）第 55 回平成 29 年(2017)11 月 5 日(日) 春日井市民の歴史・文化の誇りーふるさとのお宝ー第 87 回令和 5 年(2023)3 月 15 日(土)「書のまち春日井の書道文化ー小野道風顕彰活動の記録ー」安達 柏亭（書家・春日井書道文化研究所代表）で発表をいただいております。「書のまち春日井」というロゴは、今や地域に根付いた春日井の代名詞であり、DNA とも言えるものになっています。市街地には文化的、歴史的な風景が多くみられます。その主なものを紹介して行きたいと思います。

小野道風の立像は、松河戸町観音寺境内、道風記念館、座像は、小野小学校校庭にあります。「ふるさと」春日井は、「道風」を正しく評価し市民に伝えているか？



本フォーラムで 第 1 回平成 25 年（2013）3 月 3 日(日) 「書のまち春日井」と小野道風について 塚田 忠雄（郷土春日井研究会会長）第 8 回平成 25 年(2013)10 月 13 日(日)において、ー小野道風」生誕伝説を再評価ー根拠解明されるー道風伝説・伝承を自信をもって発信してゆくべきだ！発表テーマ：「書のまち春日井と小野道風」）で発表していただきました。塚田氏は小野道風研究の専門家です。

残念ですが昨年 10 月急逝されました。本来なら 100 回の今回締めくくりをしていただきたかったと思っております。残念です。ご冥福をお祈り致します。1 号会報で私の見解を述べましたので紙数をいとわず紹介致します。

『「ふるさと」春日井は、「道風」を正しく評価し市民に伝えているか？

道風の生誕地については、従来の研究者も、行政も「科学的根拠のない、伝承を神話のように扱って」地域の文化的特色とすることには消極的な姿勢をとってきた。

今一つ市民に「書のまち春日井」が認識されない要因の一つではなかったかと思

柳に跳びつく蛙と道風



う。市庁舎2階公開情報資料閲覧室にある資料「市民の意識調査」アンケートの結果をパラパラ繰っていて愕然とする。第五次春日井市総合計画の中間見直しに向けた基礎調査「市民意識調査等報告書」（平成24年3月）の52番目の問、春日井市独自の特色ある文化が広く知られていると思いますか？に対して、「春日井市独自の特色ある文化が知られていると思う」と回答している割合は35.6%（平成21年度調査からは、4.8ポイント増加）であった。市制70周年を迎える地域としてこの数値を高いと見るか低いと見るか。「小野道風」と「書道文化」の伝承と推進に積極的であったとは言い難い数値と解釈したい。高層12階建、威風堂々の市庁舎は、30万都市にふさわしい立派な構造物である。一市民としても自慢したい。その壁面に「書のまち春日井」「小野道風誕生地伝説」と大書し、これがわが春日井のシンボルイメージであることを指し示している。市民のみならず、訪れる多くの人々の眼に入る。ハードウェアは申し分ない。しかし、その反面、「書のまち春日井」「小野道風誕生地伝説」のイメージと現実との間には大きな温度差があるようだ。こうした現状の中での、今回フォーラムでの塚田氏の発表は、道風研究へ重要な一石を投ずるものである。今日までの道風研究の経緯をまとめ、道風誕生地の根拠を道風の孫明尊（天台座主）資料を手がかりに、太宰府、京都、滋賀等関連地域を自らの足でまわり、地元の人間でなければ感じられない原風景と歴史的閃きによって、まとめられた優れた研究成果である。奇しくも、今フォーラムの二日前（3/1）山本真吉氏（國學院大學客員教授、道風記念館顧問）によって人物叢書『小野道風』（吉川弘文館）が刊行された。273人目の学術的なメジャー入りである。本書中、「第四 道風の誕生」の章では、具体的な出生地については未詳であるが、上条か松河戸の地域であることに異論を挟んではない。この点については、塚田論文に説得力がある。「道風の里」原風景というイメージをもって、八事町広小路商店街を一路南下し、王子製紙春日井工場のある左側歩道を散策してみると、昔から道風の森と言われていた一角に公園がある。「小野道風公発祥之地」という石碑がある。さらに歩くと、歩道脇の草の茂った片隅に半分土中に埋まった「道風」の碑文のみが見える石碑が人知れず存在している。地元の人でも何人気づいていることだろうか。放置状態と言っていい。方向を右（東方）に進路を変え、和爾良神社へ向かうと、「道風腰掛けの石」「道風手植えの樹」「道風産湯の石」等々地元の人々の伝承の記憶の数々を知ることが出来る。記憶をいかに記録して行くかが課題だ。』（『会報 1』より）

History としての「小野道風」研究は実証、検証が困難であるということから、伝説、伝承、の域を出ないという状況に対して、安達柏亭氏は「伝説を語り継ぎ、大切に遺跡を守ってきた地域の人びとの活動こそが「無形文化遺産」というべきものです。」と永年に渡って伝承が語り継がれ、その記憶が大切に記録されてきた事こそが重要であると述べています。「書のまち春日井」の源流は地域の人達の地道な「記憶」と「伝承」活動にあったことが理解できた **Forum** であった。時代時代によってその意味づけが**(Narrative)**行われて



きました。『松河戸誌研究会』の「記憶」と「伝承」の活動は、幾世代にも渡って続けられてきました。そして、小野道風は、地域の「誇り」と **Identity** を生み出してきていると言っても過言ではありません。

894年に生誕した小野道風について、1200有余年の時間軸は、「記憶」と「伝承」を紡ぎながら私たちに歴史資産、文化資産を継承してきました。

「松河戸誌研究会」は、先祖代々地域に伝えられてきた「記憶」と「伝承」を地道に真摯に引き継がれ資料の蒐集、遺跡の保存、研究会を先祖代々引き継いでいる研究会であ

ります。今日の、道風記念館、遺跡保存会の存在の基礎は「松河戸誌研究会」に負うところが大きいと言っても過言ではありません。

「松河戸誌研究会」で蓄積されてきた社会的記憶、伝承（口承伝統、文書、イメージ、史跡保存、文化的行事等々）の記録の中から、道風に関する個



別の歴史研究や書道文化活動の

成果は生まれ、今日あると言うことができます。

歴史研究は、地域の人々にしか感じ得ない発想や閃を第一義に考えて行くことが重要であると考えます。その意味から、地域の人達の「記憶」「伝承」の記録の営み

は、小野道風研究にとって最も重視されなければならないことであると考えます。

歴史を語るということは、過去から伝えられてきた「記憶」「伝承」をその時々々の社会情勢、価値観、歴史意識、文化受容度等々によって記録され、叙述されて未来へ伝えられてゆくという行為のことです。』（『会報9』より）

検証・実証されない **History** は、科学的、合理的ではないので事の本質からは、軽視されるという視点である。「ふるさと学」の視点からみると、地域が「小野道風」を通してどのように意味化されてきたかという、**Narrative**（地域の意味付け・記憶・伝承）な過程が



重視され研究されなければならないと考えます。内発的意識（愛着と誇り）が重視されなければなりません。

道風晩年の心境

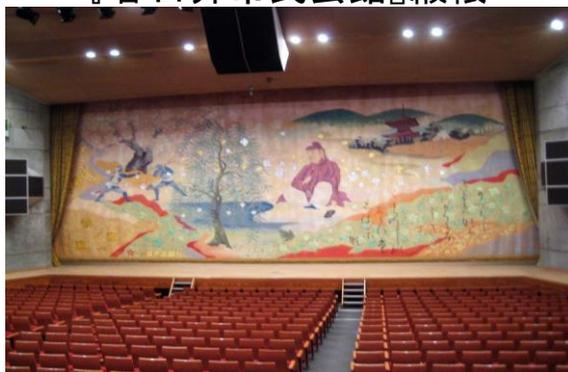


県下生徒児童席上揮毫大会



写真は「道風の風景」を示す資料

『春日井市民会館』緞帳



鳥居松商店街書の風景③



安達 柏亭 氏：

1 「小野道風生誕伝説地」

○ 本当に春日井に生まれたのですか？

こんな質問をよく聞きます。正式には伝説ですが愛知県史跡第1号に指定されています。指定された当初は「小野道風公誕生地」でした。生誕したとの根拠はなく、「・・・生まれたと（村民が）いう」と伝承として伝えられてきたというのが変更理由です。

全国に小野氏や道風を祀る神社や廟はありますが、生誕地であると主張している所はありません。

○ 春日井には生誕地が二カ所ある？

以前から「松河戸」と「上条」の二説あります。生誕伝承の諸本に記述の違いがあるからです。昭和の初め頃、両地区で大きな論争が起きたこともありましたが、「松河戸」も「上条」も同じ春日井の地区であると記述した書物もあります。

○ 史実も大切ですが顕彰活動の継承も大切この地域で江戸時代以前から道風生誕地と伝えて顕彰に努めてきた長い歴史があります。「顕彰」とは「功績や善行を称え、広く知らせること」です。道風顕彰活動として伝説を語り継ぎ、大切に遺跡を守ってきた地域の人びと

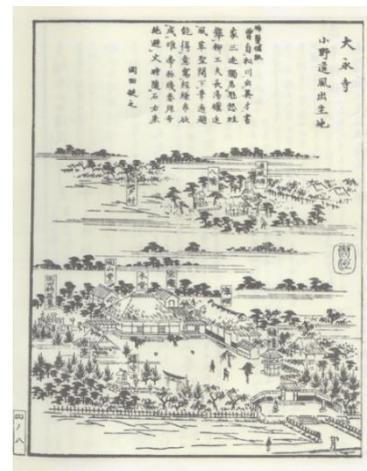
の活動こそが「無形文化遺産」というべきものです。そして大正・昭和時代に数々の顕彰活動を興し、書道振興に努めた恩人に敬意をはらい、その遺志繋げていくことが私たちの使命かと思えます。

2 小野道風の人と書

○道風とはどのような人物であったか

道風の家系である小野氏は「遣随使」で有名な小野妹子を始祖とし、代々政治・軍事・文化面で国の中心で活躍した人物を輩出しました。祖父は歌人としても有名な参議小野篁、父は大宰大貳小野葛絃です。道風は正四位下内藏権頭で公卿には列していませんが、能書として有名でした。

尾張名所図絵（道風誕生地）



○道風は書家としてどのような業績を残している？

道風は「当代第一の手書き（書の上質な人）」として尊重されており、大嘗会（天皇即位の儀式）屏風の筆者を勤め、天皇の勅書や内裏の門額を揮毫しました。三蹟の一人として称揚されています。



玉泉帖（道風筆）

道風の功績は唐様全盛の時代において、“書の和様（日本風）化”を進めたことです。書聖王羲之の再生といわれ、時代に合った書風を創始しました。『玉泉帖』は芸術的な書と評されています。

○道風はどのような書を書いた？

まず「道風真筆」と「伝道風筆」（道風が書いたと伝えられる筆跡）に分類されます。道風真筆は大変貴重なので大切にされており、ほとんどの作品が文化財指定（国宝など）されて美術館などに収蔵されています。国所有が多く、民間にはほとんどありません。真筆と認められている作品は『屏風土代』『智証大師諡号勅書』『玉泉帖』など5点あります。道風を伝称筆者とする書跡の多くも名筆であり

貴重跡です。平安時代に書かれたので優れた書は「このように上手く書くことができるのは道風しかいない」と言って大切に伝えられてきました。「伝道風筆」も貴重ですが数は少なくありません。「伝道風筆」の代表的な作品には『絹地切』『秋萩帖』『本阿弥切』『小島切』などがあります。貴重な道風の書を見られる機会は少ないのですが、春日井市道風記念館には原装複製や書籍などの資料が全て揃っています。

3 「書のまち春日井」の理由と顕彰活動の継続

小野道風は書道に関わる人たち以外にも広く知られています。道風にゆかりをもつ春日井の先人たちは、誇りをもって遺跡保存や顕彰活動を推進してきました。その核として活動したのは「秋萩会」という書道研究団体でした。この会には市内の各流派の書家がこそ

って参加し、道風顕彰と書道振興を願って書道研鑽に努めました。そして秋萩会員たちは全国へ活動の場を拡げ中心的な書家として活躍しました。まさに書道界の縮図が形成されていきました。このことが「書のまち春日井」の原点であり、書道が盛んな街の礎を作ったと考えます。75 年余も継続している全国書道展「道風展」の主張は「時代にマッチする書をめざす」としています。これは今の時代に道風の書法を推進しようするものではなく、新しい書の創造に捧げた道風の本質に学ぶということです。

道風生誕 1100 年を記念して様々な行事を展開し、多くの書道関係者や市民が参加しました。全国の著名書家が作品を寄せた「平成の書家 1100 人展」、市民約 1000 名が集った「市民大席上揮毫大会」、復活上演した歌舞伎「小野道風青柳硯」などの行事が市内各所で開催され盛り上がりました。その後も愛知万博で上演された市民ミュージカル「小野道風一しづく柳一」や合唱グループによる「道風の歌」も続いています。

道風は令和の今にあっても忘れられてはいません。道風の書が新発見されれば全国ニュースであり、道風はいつも注目されます。生誕伝説地のある春日井で道風を誇りにもって顕彰活動に参加してほしいと思います。そして、ぜひ道風記念館に行って、道風を学び、身近に語ってほしいし、書道がもっともっと（最も）盛んな街になってほしいと願っています。

石黒 直樹 氏：皆様、こんにちは。春日井市長の石黒直樹でございます。

本日は、「ふるさと春日井学研究フォーラム」第 100 回という、大変記念すべき節目の開催、誠にありがとうございます。長年にわたり、本フォーラムを支え、積み重ねてこられた関係者の皆様のご尽力に、心から敬意と感謝を申し上げます。

私自身、河地さんの深いふるさと愛に強く共感し、現在も交流を続けさせていただいております。その中で、特に心に残っている言葉があります。それは、「ふるさと意識なくして、地域の活性化はない」という言葉です。私たちの身の回りには、実は地域の魅力や特色が数多く存在しています。しかし、日常の中ではそれが当たり前となり、見過ごされてしまうことも少なくありません。「ないもの探し」ではなく、「あるもの探し」。この視点こそが、ふるさとを見つめ直す第一歩なのだ、改めて感じています。春日井市について、「このまちは “へそ” がない」と言われることがあります。けれども私は、それこそが春日井市の大きな特徴であり、強みであると考えています。春日井市は、昭和 18 年 6 月 1 日、太平洋戦争のさなかに、勝川町、鳥居松村、篠木村、鷹来村の 4 か町村が合併し、軍需産業都市として誕生しました。戦後は、農業の奨励や工場誘致に取り組み、昭和 25 年には王子製紙春日井工場の誘致を契機に、内陸工業都市としての歩みを本格化させました。さらに昭和 33 年には高蔵寺町、坂下町との合併により、人口 7 万人余の都市となり、その後、土地区画整理の推進や高蔵寺ニュータウンの整備などを経て、人口 30 万人を超える中部圏の中堅都市として発展してきました。

こうした歴史を振り返りますと、春日井市は、特定の一つの核だけで成り立ってきたまちではありません。時代ごとの役割を受け止め、多様な要素を重ねながら、今の姿を形づ

くってきました。この「重なり」そのものが、春日井市の個性であり、ふるさとなのだと思はれています。その中で、春日井市が大切に育んできた大きな柱の一つが、「書の文化」です。「書のまち春日井」。これは単なるキャッチフレーズではなく、長い年月をかけて、市民の皆さんとともに育ててきた、まちの誇りです。その原点には、平安時代を代表する書家、小野道風の存在があります。日本の書の歴史において欠かすことのできない人物である「書聖・小野道風」が、ここ春日井の地に生まれたという伝説があるという事実は、私たちにとって、まさに「ふるさとの宝」です。私たちは、この歴史を、ただ保存するだけでなく、今のまちづくりにどう生かしていくかを考えてきました。その象徴が、日本でも数少ない「書」を専門とする美術館、道風記念館です。初めて訪れた方の中には「書は難しそうですね」とおっしゃる方もいらっしゃいます。しかし、古筆から近現代書まで揃う素晴らしい作品を前にすると、「力強い」、「美しい」、「心に残る」といった声が自然と聞こえてきます。これは、書が、書く人、見る人、学ぶ人、誰にとっても「心で感じる文化」であることの証ではないでしょうか。春日井市は、このような力を持つ書を、一部の人の文化にしないことを目指してきました。道風展や席上揮毫大会をはじめとする各種書道事業、小学校 1 年生からの書道科の授業、地域に書家を講師として派遣する「わ〜く書っふ」など、その取り組みは多岐にわたります。これらの事業には、書を通して春日井市を知り、足を運んでいただきたい、こどもたちが一文字一文字丁寧に筆を運ぶことで、自分自身と向き合う時間を大切にしてもらいたい、そして地域で市民の皆さんが書に親しみ、世代を超えた交流を深めてほしい、という思いが込められています。書は、日本が世界に誇る文化です。その魅力を発信していく役割は、春日井市だからこそ担えるものだと考えています。「書のまち春日井」は、過去の文化をただ守るだけのまちではありません。

伝統を大切にしながら、新しい表現や取り組みにも挑戦し、次の世代へとしっかりと受け継いでいく。そのための土台を、私たち大人がしっかりと築くことで、自分の想いを言葉で表現できるこどもたちが、このまちで育っていくのではないのでしょうか。これからも、市民の皆さんとともに「書のまち春日井」をさらに磨き上げていきたいと考えています。

「書のまち春日井」に誇りを持ち、未来へと繋いでいきましょう。（編集：河地 清）

OPINIO 「ふるさと学」のススメ—地域活性化のキーワード—

「ふるさと意識なくして地域活性化なし」の理論的根拠は「ふるさと学」の研究を深化させてゆくことです。市民活動 100 回の講座を終えて、原点に立ち返り、「ふるさと」とは何か、総合的な視点、視角から分析、検証してゆく「ふるさと学」とは何か、なぜ「ふるさと学」ではなく「FURUSATO 学」なのかを考えて行きたい。「意味づけられた場所 (place) の形成・継承・再生の過程を歴史・文化・社会・記憶の関係の中で解明する学」が地域活性化を進めるキーワードになります。

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学 検索 